

Ⅱ 幼児期における多様性

1 幼児にとっての多様性

幼児は、この世に生を受け、父と母、そして兄弟、祖父母などによる小さな家族の中で育まれてきた心と体の成長を基盤に、幼稚園という少し大きな集団の中で自分とは違う思いをもったり、行動したりする他者と出会い、様々な葛藤を経験しながら受け止め合い、高め合って社会の一員として育っていく。まさに幼稚園は、「多様性」との初めての出会いの場である。

幼児期は、人格形成の基礎を培う重要な時期である。幼児は、他者と出会い、様々な体験を積み重ねる中で人格が形成されていく。学校教育の始まりである幼児期の教育は、その後の人生において多大なる影響力をもつと考える。

初めて出会う集団生活の中で「多様性」を学んでいくためには、一人一人を大切にしながら自己の確立を支えるとともに、多様な人と関わる機会を設定していく中で人と関わる力を身に付け、「自分も人も大切にする幼児の育成」を目指していくことが重要と考える。

一方、幼稚園は、親育ての場でもある。子をもつ親としての保護者もまた今までとは違う組織の一員として他者と出会い、自分を磨く場となる。現在、幼稚園では、様々な国籍をもった園児や保護者も増えてきている。多様な考えやしきたりなどに触れる機会もある中で、教師を含めた大人自身が自身の人権感覚を磨き、社会の一員として他者を受け入れ、認め合い、支え合うモデルの役割を担っていくことが重要と考える。

2 発達に即した育成

多様性の目指す方向性は、共存である。しかし、いきなりの共存は無理であるため、大まかな発達の特徴を抑え、発達に即した丁寧な指導の積み重ねが大切となる。

【発達の主な特徴】

0歳6か月未満

首が座り、手足の動きが活発になる。応答的に関わる特定の大人との間で情緒的な絆が形成される。

0歳6か月から1歳3か月未満

周囲の人や物に興味を示し、探索活動が活発になる。自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。

1歳3か月から2歳未満

身近な人や身の回りのものに自発的に働き掛けていく。見立てなどの象徴機能が発達してくる。自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。

おおむね2歳

基本的な運動機能や指先の機能が発達してくる。語彙も増える。強く自己主張する姿が見られる。簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

3歳児

基本的な生活がほぼ自分でできるようになる。基本的な運動機能が発達し、話し言葉が豊かになり会話を楽しむようになる。自己を中心に考える時期である。

4歳児

協応動作も上手になる。周囲の環境に強い関心を持ち、友達と発見したり、工夫したりして遊びを豊かにしていく。言葉による表現が進み、イメージ遊びを楽しむ。

5歳児

自分なりに判断したり批判したりする力が生まれ、自分とは違う思いや考えを認めたり、社会生活に必要な力を身に付けて行動できるようになる。

(就学前教育カリキュラム改訂版ハンドブック 東京都教育委員会平成30年3月発行より抜粋)

【幼稚園生活における人との関わりの発達の大まかな道筋】

- ① 安心・安定・・・・・・・・・・幼稚園での生活の仕方や流れが分かり、自分の居場所を見付け、安心して遊べるようになる。
- ② 関わり合う・・・・・・・・・・安心して遊べるようになると、周りへの関心が高まり、行動範囲も広がり、人との関わり合いが増えてくる。人を選んだり、物の取り合いをしたり等のトラブルが多くなる。
- ③ つながり合う・・・・・・・・・・学級の一員としての意識が芽生え、みんなですることの楽しさが分かり、学級の中でも伸び伸びと自己を発揮するようになる。
- ④ 受け止め合う・・・・・・・・・・気の合う友達ができ、互いに自分を出しながら友達と遊ぶ楽しさを味わうようになる。相手の思いや考えを受け止められるようになってくる。
- ⑤ 支え合う・・・・・・・・・・共通の目的に向けて折り合いを付けながら遊びや活動が進められるようになってくる。よいことや悪いことを自分で考えて行動するようになる。
- ⑥ 生かし合い・高め合う・・・友達の得意な面やよさを認め、生かし合って遊ぼうとする。友達とルールを作って遊ぶ楽しさや力を合わせてやり遂げる喜びを味わうようになる。

3 事例

幼児期は様々な体験を通して学んでいく時期である。他者と共存し、受け止め合えるようになるためには、多様な感情体験ができる機会や、発達に即した適切な指導が必要となる。また、幼児を取り巻く保護者支援の役割を果たすことも幼稚園には求められている。以下、様々な体験を価値付け、「多様性」を育てるためにはどのような援助が必要なのかを事例を通して示していく。

事例1 不安な気持ちを安心に変えるために (安心・安定)

「Bちゃんのそばにはいかないの」(2年保育4歳児 4月)

入園して2週間が過ぎた頃、登園してきたA児の様子がおかしい。保育室に入るのにもキョロキョロしている。担任が「どうしたの？」と声を掛けると「Bちゃん、いない？」と聞いてきた。担任が「まだ来ていないね」と答えると「よかった」と言って保育室に入ってきた。そこにB児が元気に「おはよう」と言いながら保育室に入ってくると、A児は急いで保育室の隅に隠れた。担任が「Aちゃん、どうしたの？」ともう一度声を掛けると「あのね、ママがBちゃんのそばにいつちやいけないうって言ったの」と言った。担任はびっくりして「なんで、ママはそんなこと言ったんだろう。Bちゃんと何

かあったの？」と聞くとA児は「お砂をかけたから」と答えた。担任は「Aちゃん、大丈夫だよ。困った時には先生が助けるから。Bちゃんにもお砂掛けないでって先生から言っておくから心配しないでいいよ。いっぱい遊ぼう」と声を掛け、一緒に身支度をして一緒に遊び出した。A児は安心したのかその後は安定して遊んでいた。

担任は、降園時に朝の様子やA児の言葉を保護者に伝えた。保護者は「すみません。昨日砂場で砂を掛けられたというので近くにいると砂がかかるからそういう時は離れなさいと確かに言いました。私が言ったことをちゃんと守ろうとしていたのですね。先生、うちの子をよく見てくださいね」という答えだった。

キーワード 安心感・安定感 信頼関係 他者の存在を知る 保護者の視野を広げる

A児は一人っ子で、家で静かに遊ぶことが多く、同世代の子供たちと関わる機会も少なかった。幼稚園に入って初めての集団生活の中で、いろいろな表出の仕方をする子供たちと出会い、日々戸惑う姿も多く見られた。そして保護者も初めての集団生活。我が子の戸惑いを一緒に受け止めてしまい、短絡的な対応で我が子を守ろうとした。A児は親の言うことを素直に受け止めてしまい、不安感が増してしまい、不安定な状態になってしまった。

入園当初は、初めて出会う人やもの、出来事などに対して不安な気持ちと新鮮な気持ちをもつ時期である。そこで、集団生活の中で、自分のしたいことがじっくり楽しめるような時間や場、空間を保障し、安心感をもって過ごせるようにすることがまず、大前提となる。その上で、自分と違う動きをしたり、思いをもったりする他者がいることに気付かせるとともに、互いが居心地のいい関係になれるように一緒に楽しめる遊びや活動を取り入れたり、保育者も一緒に楽しんだりすることが必要となる。また、困った時にはいつでも言ってくるという雰囲気や、思いを十分に受け止める安心感や信頼感を日々の生活の中で築いていくことが大切である。

保護者に対しても安心感がもてるようにしていくことが重要である。幼児期は、特に周囲の大人がモデルとなってしまう、ものの見方や考え方、人との関わり方等が浸透してしまうことや、幼児期には、様々な出会いや経験を繰り返すことが必要であることなどを幼児の成長を伝えながら視野を広げて共に育てていくことができるように繰り返し発信していくことが必要と考える。

「多様性」は、人と関わることを通して育まれる。人と関わることを避けるのではなく、関わり合う中で互いを受け止め合えるようにしていくことが大切である。

事例2 自分の遊びが楽しめるように (安心・安定)

「これは僕の！」(3年保育3歳児 4月)

C児は電車が大好き。毎日プラレールをつなげ、電車で遊んでいる。今日は登園が少し遅れてしまい、遊び出しが遅れた。身支度を終え、遊び出そうとしたが、自分のお気に入りの電車が見当たらなかった。すでにD児がそれを使って遊び出していた。C児はD児を押して電車を取った。D児は泣きながら電車を取り戻そうとしたが、C児は「これは僕の」と言って離そうとしなかった。

キーワード 思いの受け止め じっくり遊べる時間や場 十分な物の数

3歳児は自分を中心に考える時期である。自分の気に入ったものはいつでも自分だけが使えるものと

思っている。幼稚園にあるものはみんなのものという意識が芽生えるには、まずは自分の遊びをじっくり楽しめるようにすることが大切である。自分が楽しかったという経験の積み重ねにより、他者の動きにも気付き始め、一緒にいることに抵抗感がなくなり、順番や交代もできるようになってくる。そのためには、十分に遊べる時間や場、物の数などの配慮と自分の思いを受け止めてくれる保育者の存在が重要である。トラブルの機会を育ちの機会と捉え、丁寧な関わりが「多様性」の育成につながっていく。

事例3 友達と楽しく遊ぶためにはルールがあることに気付くように（関わり合い）

「Eちゃんがずるした」（2年保育4歳児 6月）

E児が大きな声で泣いている。理由を聞くと「Fちゃんが押した」と言う。F児は「だってEちゃんがずるしたから」と言う。それを聞くとE児はもっと大声で泣き出した。

二人はいつも一緒に遊んでいる仲良しである。今日も魚釣りで遊んでいた。F児は作ったり描いたりしたりするのが得意で魚を作って魚釣りを楽しんでいた。E児は自分では作らずにF児の作った魚を釣って遊んでいた。F児はしばらくその様子を見ながらも一緒に遊んでいたが、自分が釣ろうとした魚をE児が横から釣ってしまい、怒って押してしまった。

キーワード 互いの思いの受け止め 遊ぶためのルール 伝え方への気付き

園生活に慣れてくると、自分のやりたいことが明確となり、自分なりの動きをし始める。二人は仲良しだが、性格も得意なことも違っている。F児は自分の得意なことを生かして自分なりの遊び方を楽しんでいるが、E児は自分のやりたいことだけをする遊び方になっている。E児にはF児が押した訳を知らせ、なにか「ずる」なのかを分かりやすく伝える必要がある。その上でF児にはどうすればよかったのかを言葉でE児に伝えられるように橋渡しをする。E児には友達と楽しく遊ぶためには、遊びのルールがあることに気付かせ、自分で動き出せるように一緒に魚を作ったり、作り方を知らせたりしていくことが必要となる。

人と関わる上では、自分だけの思いで行動してしまうとトラブルになってしまうことがある。その時、その場面を捉えてそれぞれの思いを受け止め、言葉にして分かるように伝えていく指導を繰り返していくことが大切である。

事例4 相手の思いや考えに気付き、自分を振り返られるように（受け止め合い）

「僕だけ入れてくれない」（2年保育5歳児 5月）

2年保育5歳児、5月。年長としての生活にも慣れ、気の合う友達との遊びを楽しみ始めている時期。G児は、毎日大型積み木を使ってバスごっこを楽しんでいる。今日もG児は大型積み木を使い、バスを作り始めた。そこに何人かが「入れて」と入り、座る場所を作ったり、バス停を作ったりしながら遊び始めた。

H児は、別の場所でしばらく遊んだあと、バスごっこで遊んでいるG児に「入れて」と言って入れてもらおうとしたが、G児は「もういっぱいだからだめ」と断った。

そこへ、お家ごっこをしている女兒たちが「バスに乗せてください」とやってきた。G児は、「カードを作ってきてください」と女兒たちには対応したので、H児もカードを作り、また、「入れて」とG児に言ってみたが、G児は「そのカードじゃないんだよね」と言って拒否した。

H児は、「なんで僕だけ入れてくれないの」とG児に言うが、G児が対応しないため、保育者に「G児が入れてくれない」と訴えに行った。保育者は、「そうなんだ。なんで入れてくれないのだろうね。一緒に聞いてみようか」と言ってH児と一緒にG児のところへやってきた。

保育者と一緒に戻ってきたH児が「なんで入れてくれないの?」と聞くと、G児は「だってさ、一緒に作ってないし、いっぱいだし、それに前に入れたとき、片付けのときにいなくなっちゃたし、いやなんだよね」とつぶやくように言った。H児は「今日は片付けるもん」と言うが、G児は返事をしなかった。

キーワード 思いの伝え合い、遊びの充実、約束を守る大切さ

5歳児の5月頃になると、年長としての生活や場にも慣れ、自分たちの遊びを展開し始める。しかし、まだまだ自分を中心に考えるため、遊び方や人間関係におけるトラブルも生じている。この事例では、G児は、以前一緒に遊んだときのことからH児の行動が気に入らなくなっているため、その思いを「遊びに入れない」という行動で示し、H児は、自分の行動には気付かず、自分の思いだけで遊びに入ったかぶり抜けたりしている状況にある。このような場合には、一緒に遊ばせることを目的にするのではなく、まずはG児の思いを受け止め、なぜ遊びに入れたくないのかをH児に分かるように伝えられるようにし、その上でH児の気持ちにも気が付くことができるように橋渡しをしていく。H児にはG児の言葉から自分の行動を振り返られるようにしながら、友達と遊ぶ時の約束などに気が付くようにすることが大切となる。

幼児期はこのような様々なトラブルを経て、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりしていく。その後は、G児にもH児の行動の変化を伝えながら排除するのではなく、徐々に相手の頑張りや成長の姿に気付かせ、一緒に遊べるように援助していくことが必要となる。

事例5 互いのよさを生かし合う（生かし合う）

「Jちゃんは絵がうまいから」（2年保育5歳児 1月）

年長3学期が始まり、新しい生活グループを作ることになり、担任は、いろいろな人と関わってほしいという思いから「今まで同じグループになったことがない人と組もう」と投げ掛けた。

I児は、周りを見渡しながらかみり遊んだことのないJ児に「一緒になろう」と声を掛けた。J児が嬉しそうな顔で「うん」と答えたため、I児はほっとした表情となり、今度は二人でほかのメンバーを探しに行った。

六人グループとなり、グループの名前を決め、絵を描くことになった時、I児は「Jちゃんは絵がうまいから、Jちゃんに描いてもらおうよ。私たちは色を塗ろう」と提案するとグループのみんなも「いいね。Jちゃん本当にうまいよね」と答えていた。

キーワード 課題を受け止める 友達の得意なことを生かす

この時期になると、友達の特徴や得意なことが分かり、認め合って生活するようになる。教師の思いも受け止め、課題に対しても積極的に取り組むようになっていく。これまでの経験の積み重ねを生かし、自分たちで生活を作っていくことに自信がもてるようになっていくことが大切である。

このように発達の時期や個々の幼児の実態を的確に捉え、一人一人に応じた指導を丁寧に、繰り返し

行っていくことが、「自分も人も大切にしようとする姿」につながっていくと考える。

事例6 外国籍の幼児や保護者を支える

「毎日ぶたれるから幼稚園に行きたくない」（2年保育4歳児 7月）

個人面談の時、外国籍の保護者から「毎日、Lちゃんがぶつから、幼稚園に行きたくないってうんです」との訴えがあった。K児は親子ともに外国籍である。K児とL児はロッカーが隣同士でK児は強引に割り込むため、時々トラブルになっていた。幼稚園側は、その場の指導はしているつもりであったが、K児には自分だけがやられるという思いが残ってしまっていた。また保護者にもその場で対応をしていることを降園時などには伝えていたが、うまく伝わっていなかった。

キーワード 言葉の弊害、保護者への対応 安心感

外国籍の親子の場合は、伝えたことが正確に伝わらないことが多々ある。言葉の理解が難しい場合には特に伝える工夫をする必要がある。幼児同士のトラブルは、気持ちの切り替えができないままに降園してしまつては今回のように保護者を巻き込んでの大きなトラブルに発展しかねない。教師には、幼児に対しても保護者に対してもより丁寧な対応が求められる。視覚的に分かりやすくしたり、具体的に行動を伴って伝えたりすることや、頻繁に声掛けを行い、関係を密にしていくこと、伝えたことがきちんと理解できているのかの確認を丁寧にしていくこと等が必要と考える。

また言葉の弊害がある外国籍の保護者に対しては、幼稚園の教員ですべて補うことは難しい。区の関係諸機関の援助や他の保護者の協力等も得て、外国籍の親子が孤立せず、安心して園生活が送れるよう配慮していくことが大切である。

事例7 特別な配慮を必要とするお子さんの保護者を支える

「うちの子ってそんなに大変ですか」（2年保育4歳児 9月）

「先生、うちの子ってそんなに大変ですか？」登園してすぐにM児の保護者が園長に声を掛けてきた。場を変え、ゆっくり話を聞いてみると、いつも仲良くしている保護者の方に「2人もよく生んだね。大変でしょう」と言われたということだった。

M児は自閉的傾向があり、3歳児のときから療育センターに通っていて、幼稚園には特別に支援を要するお子さんとして介助員を付けて入園した。入園後は落ち着き、みんなで一緒に活動することにも喜んで参加するようになってきた。その後、M児の母親は下の子の動きも気になりだし、療育センターに相談に行くようになった。そのことを仲良しの保護者の人にも話をしていたらしい。そしてその一言に傷付き、園長に相談をしにきた。母親は「私は、大変とは感じていないし、自分の子供だから大事に育てようと思っているのですが・・・」と涙いっばいためて思いを伝えようとしていた。

キーワード 大人の人権感覚 自分とは違う人の存在への気付き 互いに居心地がいい関係作り

幼稚園は、親育ての場でもある。しかし、相手の立場になり、相手を思いやることは大人でも難しい。心無い一言で傷付く人がいることを大人にも気付かせていきたい。子育てに悩まない親はいない。特別な支援を必要とするお子さんを育てている保護者の方はなおさらである。幼稚園には、一人一人の保護者を支える役割もある。保護者を支え、子育ての喜びを味わえるようにしていくためには、子供の成長

を具体的に伝えることや、家庭との連携を密にし、同じ思いや方法でその子の困り感に寄り添い、支援していくことが大切である。また、学級の一員として一人一人を大切に教育しているという幼稚園の教育方針を保護者会や学級懇談会、降園時間のおしゃべりの機会などの様々な機会を利用して保護者に示していくことが必要である。大人が変わらなければ子どもは変わらない。大人の姿勢が子供の人格形成に影響を及ぼすということも機会あるごとに伝え、親育てにも力を注いでいくことが大切である。

障害のある幼児や外国籍の幼児などには、特に個別の支援計画などを立て、丁寧に指導をしていく必要がある。その子自身の安定が学級の安定につながる。一人一人が自己発揮をしながら、友達として支え合い、高め合う関係を構築できるように組織的・計画的に保育を進めていくことが大切である。

4 まとめ

近年、幼稚園や保育園、こども園では、個々の育ちの発達の差だけでなく、特別な配慮を必要とする幼児や外国籍の幼児も増え、まさに「多様性」との出会いの場となっている。教員は、この場を重要な場と捉え、幼児の人権感覚を磨いておくことがその後の人生の基盤になることを自覚し、実践に結び付けていくことが大切と考える。

幼児期は、様々な体験を通して学ぶ時期である。「多様性」を受け止め合えるためには、自己の安定を基盤に生活や遊びの中で人と関わり、様々な感情体験が味わえる機会を設定していくことが必要となる。

教員の役割をまとめてみると、以下の6点が重要と考える。

- ① 幼児期が個人差の大きい発達の時期であることを自覚し、一人一人に応じた丁寧な対応を心掛けること。
- ② 幼児の思いや考えを理解したり共感したりしながら信頼関係を築いていくこと。
- ③ 一人一人がかけがえのない存在であることを基本に、一人一人の「困り感」を受け止め、状況や状態に応じた指導の工夫をしていくこと。
- ④ 人と関わる力を身に付けるための遊びや活動を計画的に取り入れていくこと。
- ⑤ 特別な配慮を必要とする幼児に対しての専門的な知識をもつこと。
- ⑥ 幼児を取り巻く大人の存在の重要性をもっと自覚し、親育てを組織的に行っていくこと。

また、教員の資質向上がますます求められている今、行政や管理職には、人権研修会などの様々な研修会を設定するだけでなく、研修内容の充実や工夫が必要であり、教員自身が多様な体験を得て人権感覚や対応の仕方を身に付けていかれるようにしていくことが大切である。

さらに、幼児期に育んだ人権感覚や人と関わる力を小学校以降の教育につないでいくことも幼児教育に携わる者の使命である。そのためには、今回の改訂に示された3つの資質や、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を子供の姿を通して小学校に伝えていくことが必要である。子供を中心とした教育観を語り合い、育ちをつなぎ、高めていかれるような連携の強化を管理職が率先して行い、成果を上げてほしいと願っている。

幼児にとって身近な大人の影響力は大きい。多様な人と出会い、他者を知り、受け止め、支え合うことを大人がモデルとして示していくことが幼児の「多様性」の育成につながっていくと考える。